

あらすじ
たとえば、ドングリを拾いに
未だ収束の見えないコロナ禍の中、私（塚
本真里）は大手小売業「大川紳士服」をリス
トラされる。深い喪失感に陥り、数週間経っ
た今でも立ち直れずに自暴自棄な生活を送っ
ている。
父のことで話があると兄から呼び出されて
帰省した私は、中年の男と出会う。高齢の父
の世話をする訪問ヘルパーの福田である。父
が施設に入所することを彼から聞かされる。
働き盛りの男である福田が、ヘルパーとい
う仕事をしていること、私は蔑みの感情と
優越感を抱く。その彼から、翌日の植樹サ
ークルの活動に誘われて、私は行くことにし
た。
登山道を歩きながら、彼の妻がコロナによ
って死亡したことを福田から聞かされる。樹
木を守る活動によって、自分が生かされてい
るのを実感できる、と福田は話す。

ドングリ拾いの最中、私はメンバーたちと
はぐれてしまう。雨が降り始める。視界も悪
くなり方向も定められず、私は森を彷徨って
しまう。足
足を滑らせて捻挫する。痛みと疲労と恐怖
で座りこみ、死を覚悟さえする。か
かじかむ手をポケットに入れると、ドング
リが手に触れる。生命力を感じる。生まれ
くる兄の子を想像し、庭に立って山を見上
る父の背中を思う。生きたい、と思う。
痛みを堪えて立ち上がり、一步を踏み出
憎しみや執着といった負の感情が自分から離
れていく。雨が上がり、森の生命力が体中
満ちてくる。

。